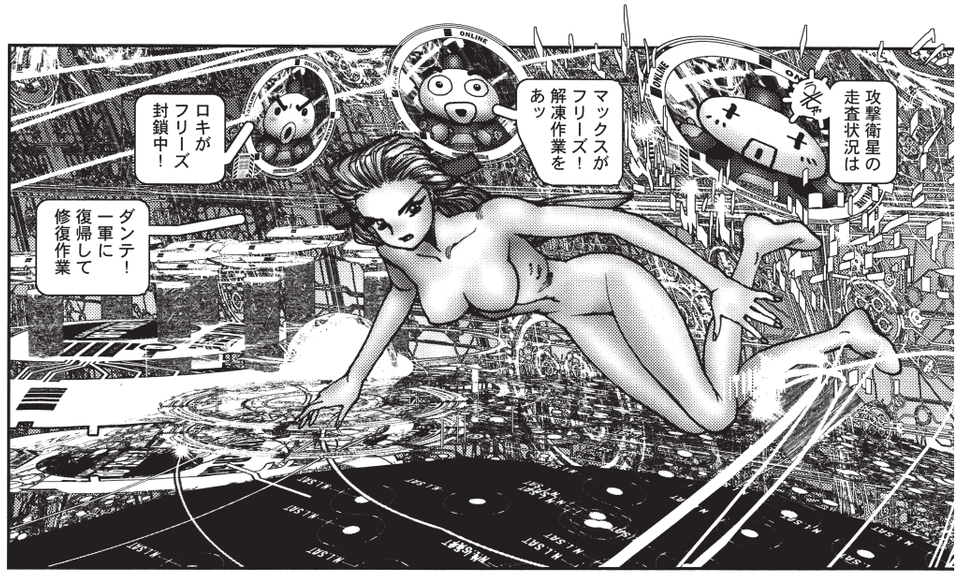
『攻殻機動隊』の三つの空間

さやわか（批評家）

ネットワークの発達する近未来で起こりうる様々な事象について、あたかも予言するかのように描いたことで知られる『攻殻機動隊』。本作には複数の仮想空間が示唆的に登場する。そこには実空間と仮想空間における境界の曖昧化が描写されていた。



『攻殻機動隊』で描かれた電脳マトリクス空間。空間に漂う登場人物は、あくまでも概念として描かれている。（第二巻 〇五話より）

ブルース・リーの出自には謎が多い。はっきりしない点が多くあり、今なお定説が定まっていない。疑いのないこととしては、彼は役者の父と、白人と中国人の血を受け継ぐ母を持つ。

この母方の血筋をたどると、彼女は英国占領時代の香港で四大家族と呼ばれた大財閥のひとつであった何東一族出身で、〝カジノ王〟として君臨したスタンレー・ホーの親類であることがわかる。だが母は養女だったらしく、その出自はよくわかっていない。ドイツ系ではないかと主張する向きもあるが、ユーラシア系だという説もある。だからブルース・リーについてもひとまず、何東一族の系譜にある、とまでしか言えない。

母がブルース・リーを産んだのはアメリカ、サンフランシスコでのことだ。しかし生まれてしばらくすると、両親の移住に伴い、彼も香港へ渡る。ところが一〇代後半になって彼は再び渡米し、そこでようやく今日知られるような映画アクションスターとして活躍を見せることになる。実に目まぐるしい。この複雑な出自のせいで、香港においても、アメリカにおいても、人種的に肩身の狭い思いをしたという。

彼が映画『燃えよドラゴン』（一九七三）の冒頭シーンで放ったあまりにも有名な台詞「考えるな、感じろ」（Don't think, feel!）には、後に続く言葉が存在する。

「それは月を指さすようなことだ。（その時には）指先に意識を集中してはいけない。さもなくば大いなる栄光をみな失ってしまう」（It's like a finger pointing away to the moon. Don't concentrate on the finger, or you will miss all the heavenly glory.）

というものである。つまりこの有名な台詞は、劇中の文脈においては「些細なことに惑わされるな、全体を捉えろ」という意味である。

先記したような、彼の人種や回歴にまつわるエピソードを思い出すと、より深い趣が感じられる言葉だろう。おそらくブルース・リーは、お前は何者なのかと、どこに属するのだと、いつも周囲から懐疑の目を向けられていた。だが彼には、人々が人種などの些細なことに惑わされ、彼の全体を捉えてくれていないように見えていたはずなのだ。

もちろん、銀幕に映し出された彼の姿は虚構であり、現実のブルース・リーこと李振藩とは異なると言うこともできる。「考えるな、感じろ」という台詞は、彼の生きた現実とは関係ないのだ。しかしそうだとしたら、ブルース・リー自身とは、彼の現実とは、いったい何なのだろうか。すると話は冒頭に戻り、謎が多い男だった、ということになってしまう。

彼は今なお人気のスター俳優であり、その功績は輝かしいものとして語られる。しかも彼の表現は、その肉体の生々しさと精神の強さから生まれている。それだけ確固とした、光に照らし出されたような人物であるにもかかわらず、現実のブルース・リーがどこか不明瞭であることは、不思議にも思えてくる。

肉体と意識のたしかさ

人の現実と肉体が、それらに対する意識と裏腹に、どれだけのたしかさを伴って存在しているのか。今このことについて考えるにあたり、筆者は士郎正宗の漫画『攻殻機動隊』を参照したい。これは、日本のサイバーパンクSFの金字塔と言っていい作品である。この漫画は第一話が一九八九年に雑誌掲載され、単行本の第一巻にあたる『攻殻機動隊 THE GHOST IN THE SHELL』（講談社）は一九九一年に発売された。当時そのハードなアクションと電脳犯罪を描いた内容は多くの読者を驚愕させ、極めて高度な内容にもかかわらず、マニアだけでなく多くの一般読者を熱狂させるにいたった。

本作を原作としたアニメ作品も高い評価を得ている。一九九五年に押井守監督のもと作られた最初のアニメ映画は国際的なヒットとなり、フェイヴァリットとして挙げるファンが世界中に数多く存在する。このアニメ映画を端緒として、やがてテレビ放送向けも含めた新作アニメがたびたび作られるようになり、現在でも頻繁に新シリーズが発表されている。アニメ作品の出来に比して語ることはできないが、二〇一七年にはスカーレット・ヨハンソン主演でハリウッド映画化もされている。

しかしこの作品で語るべきは、その経済的な成功についてよりも、やはりそのサイバーパンク描写の革新性についてである。原作の時代設定は二〇二〇年代末から二〇三〇年代半ばまでだが、前述のように士郎正宗がそれを描いたのはまだインターネットも黎明期の時代だ。しかし、ここに描かれたネット社会やAI、サイバネティクスによる身体拡張などは、その多くが既に現実のものとなった。

単に同様の技術が登場したというだけではない。それらのテクノロジーの利用によって社会がどう変わり、どのような問題が起きるかが、まるで未来を予見したかのように描かれているのだ。人間たちはテクノロジーで能力を拡張し、もはや自らも機械化されたシステムの一部にすらなっているが、さりとてそれらのテクノロジーを決して捨て去ることもできず、むしろそれら

この続きは本誌でどうぞ！